

〔庖丁聞書〕一海老に、舟盛ひけ盛、廻り盛と云口傳有

〔大草殿より相傳之聞書〕一海老のふなづみの事、本膳にもあれ、二三の間にもあれ、集養はおなじ事也、先ゑびを臺共に右の手にてとり、我が前にて左の手をそへて、いかにもくかんする心もちをして左の手に取、右の手にてほづなをばづし、海老の頭のかたへかけ、我が右の方のた、みにをきて、まばらく座中をみあはせ、よきころにはばしらをぬきて、ほばしらさきにてゑびのみをさして、左の手にてぬき、右に又とり、ほばしら持たる手にて集養あり、其後ほばしらをさみかけて、海老の上にをき、いかにもたべたき程手にてたべべく候、扱よの手の物にはちとかはり、まばらく我前にをきて、膳のくだり候時、膳の中をく也、

甲盛

〔庖丁聞書〕一甲盛と云は、大蟹の甲を仰けて、焼蟹の中に盛也、

〔四條流庖丁書〕一カザメ搦鉢ノ事、可盛カタチ流ニ餘多有哉、雖然當流ノコトハ各別也、是ニ龜足ナク

シテハ、假初ニモ御前へ不可參、甲ニ盛ベシ、若カザメノ甲ナクバ、土器ニ可盛也、當世折敷ニ取雙テ參スル不可然事也、

姫盛

〔庖丁聞書〕一姫盛といふは、荒和布を盛たるを云也、

花盛

〔庖丁聞書〕一花盛と云は、色々に染て合せて盛を云、

沈盛

〔庖丁聞書〕一沈盛と云は、鮫魚の干物を削て、土器に盛て出す也、沈香に似たる故名とす、

ウス盛

〔庖丁聞書〕一うす盛といふは、巻鯛を盛たるをいふ也、

〔大草殿より相傳之聞書〕一鮎のほうらいづみの集養の事、のぼり鮎の時は、かしらを取おろし候、そのまゝ、いたの下にそへをく也、くだり鮎のほうらいづみの時は、うをの頭をはしにはさみ魚のをのかたへむけてをき、魚のを、右の手にて取を集養有て、残りたるは本膳の前にをき、魚のみをばはしにてくふ也、のぼり鮎もくだり鮎も、鮎は本膳にむき候、